第３課　利益もないのに神を敬うでしょうか

【暗唱聖句】

ヨブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」このようになっても、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。ヨブ2:10

【今週のテーマ】

今週は、大争闘が激しさを増す中、わたしたちがいかに適応すべきについて学びます。

【日曜日　神の業、ヨブ】

ヨブ記1章の中で、サタンは誰を攻撃しているのかを考えてみましょう。サタンは、「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか」（ヨブ1:9）と、一見をヨブを攻撃しているかのように見えますが、「あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか」（ヨブ1:10。だからヨブは神に従順でいられるのだと、ヨブを通して神を攻撃していることがわかります。このサタンの攻撃を人間的に置き換えると、神は不公平ではないかという主張に見えてきます。教会でも家族に恵まれ、経済的にも成功をおさめたクリスチャンと、そうではなく本当に苦労しているクリスチャンがいたとき、不公平に感じることはないでしょうか。ある人は献金するのもやっと、教会に通うのもやっとかもしれません。しかし、その横で高級車に乗り、高級な洋服に身を包んで教会にやってくる恵まれた方もいるかもしれません。神は不公平だ。もし、このような思いが生じるとしたら、それはサタンの誘惑かもしれません。おそらくサタンも、イエスに対して、自分よりも恵まれている、神の祝福を多く受けているように思えたのではないでしょうか。

神は不公平だ。ヨブの神への信仰は、神がヨブを特別扱いしているからだ。だから、それを取り上げてしまえば、きっと神を呪うことでしょうとサタンは主張しました。サタンの神に対する欲求不満のようなものが見え隠れします。サタンはヨブを通して、神を攻撃しているのです。

またこの攻撃は、人間の純粋な信仰によって神があがめられているわけではない、まるで商取引を行っているかのように、そうすることが得になるからあがめられているにすぎない、つまりご利益宗教の神として、あなたは人間からあがめられ、信仰されているに過ぎないのではないかと攻撃されているわけです。

【月曜日　皮には皮をー戦いは続く】

ヨブ記2:1～3における神とサタンとの会話は、1:6～8と同じような内容になっています。ヨブ記1章の後半で息子、娘、その家族や家、従者、家畜などすべてが奪い取られたとの報告を聞いた後、「ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏し、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」（ヨブ1:20、21）と祈って、神を非難することなく、罪を犯しませんでした。だから、神はサタンに、ヨブはそれでも「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」と言いました。

すると、サタンは「皮には皮を、と申します。まして命のためには全財産を差し出すものです。手を伸ばして彼の骨と肉に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」（ヨブ記2:4，5）と、最初は禁止されていたヨブ自身を攻撃すれば、神を呪うでしょうと主張します。神は「命だけは奪うな」と言い、サタンがヨブを打っても良いと許可します。神から許可を得ると、サタンはただちにヨブを「頭のてっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせ」ます。あまりの痒さのために、素焼きのかけらで体中をかきむしるほどでした。

さて、これらの一連の神とサタンとのやり取りは、天において起きたことでした。つまり、天の住人たちの見ている前で行われたことでした。このことから理解しなければならないのは、大争闘の本質です。それはこの地球の誰も知らない隠れたところで起きているのではなく、天を巻き込む宇宙規模で起き、全宇宙を前に起きているのです。

「しかし、贖罪の計画は人類の救済より、もっと広く深い目的を持っていた。キリストが地上に来られたのは、人間を救うためだけではなかった・・・それは宇宙の前で、神の性質を擁護するため・・・神と御子がサタンの反逆に対して取られた処置の正当性を全宇宙に示すのであった。それは神の律法の永遠性を確立し、罪の性質とその結果を明らかにするのであった」

【火曜日　主の御名はほめたたえられよ】

１章13節に、さっそくサタンはヨブの家族に攻撃を仕掛けてきた光景が描かれています。子どもたちが長男の家に食事会をしていた日、まずシェバ人が畑を襲い、略奪していきます。次に、天から火が降ってきて、羊も羊飼いも焼け死んでしまいます。さらにカルデア人が三部隊に分かれてらくだの群れを襲います。そして、最後には大風が来て四方から吹きつけて、子どもたちとその家族はみな死んでしまいます。このような知らせがヨブのもとに、その場にいて一人だけ生き残った僕から次々舞い込んできたのです。この知らせを聞いた直後にヨブがとった態度が次のように書かれています。

「ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言った。1:21 「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」 1:22 このような時にも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった」ヨブ1:20～22

ヨブは立ち上がり、衣を裂きます。これは激しい悲しみを現しています。そして髪をそり落とし、地にひれ伏して祈ります。その祈りの言葉はあまりにも有名です。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」。このような突然襲い掛かる災いの中にあって、ヨブはサタンが主張したように、主を非難することなく、罪を犯さなかったのです。

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう」…自分はもともと何も持っていなかったということ。すべては主が与えられたもの。主がそれを取られるのであれば、それはもともと主から来たものだからそれを受け入れる。ヨブができることはただ、何があっても主の御名をほめたたえる、これがヨブの信仰でした。

しかし、「主は奪う」という言葉と、「主の御名はほめたたえられよ」、との言葉に至るまでには無限の距離があります。ヨブは心からそのように言えたのか。それとも絞り出すようにそう言ったのか。自分ならどうだろうと、ヨブに重ねて考えてみましょう。

【水曜日　ヨブの妻】

ヨブ記の物語で、サタンによって苦しみ、悲しみに追い込まれたのは、ヨブだけではなく、ヨブの妻もそうでした。ヨブの妻の気持ちを想像することは難しいことではないでしょう。神様はヨブのことは褒めておられますが、ヨブの妻については何も語っていません。神様はヨブの妻をどのように見つめておられたのでしょうか。ヨブの妻までこの悲劇に巻き込まれてしまったということの中に、苦しみの普遍性が現されています。わたしたちはみな、大争闘に巻き込まれており、誰一人逃れることはできません。

このような状況の中で、なおもヨブは神に対して無垢（誠実）であり続けました。それは神が称賛されるほどのものでした。ところが、そのヨブのどこまでも無垢であるのを見て理解できず、ヨブの妻は悲しみの中で、まさに神がヨブにしないであろうと言われたことをするように言ってしまいます。

「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」ヨブ記2:9

サタンの攻撃が一番近くの人からくることがあります。わたしたちも、お互いに気を付けなければなりません。この妻の言葉に対してヨブはこう言います。

「ヨブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」このようになっても、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった」ヨブ記2:10

ヨブは「神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか」と言って、罪を犯さなかったと聖書は記録しています。それが悪いことであっても、主が良しとされるのなら、それを信仰で受けとめていく、これこそが信仰者の正しい姿です。

【木曜日　死に至るまでの従順】

「ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった」とありますが、これはヨブには罪がなかったというわけではありません。しかし、次から次へと襲ってくる試練のただ中にあって、言葉においても、態度や行動においても、神様を非難することはしませんでした。主に忠実でありつづけました。その意味において、ヨブはイエス・キリストの象徴であったということができます。つまり、イエスの心で生きていたということです。イエスは十字架の死に至るまで忠実でした。ゲッセマネにおける重圧の中でも、「この苦い杯を私から取り除いてください」と言いながらも、「しかし、御心のままに」と祈りました。

「少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」マタイ26:39

クリスチャンだからといって、すべての出来事に対して喜んで相対するわけではありません。苦しみの中で、血のしたたりのような汗を流しながして祈りながら、「でも、わたしの思いではなくあなたの御心のままに」と祈ることもあるのです。